

ではないかと思われます。本校では体育館など後世の建築物にもカトルフォイルを付けて駒杵の思いを繋いでいます。



西翼端の切妻破風の庇飾り



教室天井の通気孔



基礎の通気孔飾りの金具

9 柱頭飾り

—アカンサスの花を模したクロケット（拳華飾り）—

尖頭アーチを支える柱の先端部を柱頭といいます。駒杵は、玄関ポーチの尖頭アーチを支える4本の角柱の柱頭にコリント式の柱頭飾りを採用しています。古代ギリシャ建築様式の一つであるコリント式はアカンサスの葉や花を飾った華麗な柱頭が特色です。旧本館ではアカンサスの花をモチーフとした、握り拳のように先端が丸くて突出した装飾であるクロケット（拳華飾り、拳葉飾り）にしています。コリント式の柱頭飾りは、駒杵設計の旧太田中学校講堂のように、アカンサスの葉をモチーフとしたものが一般的ですので、旧本館のような花をモチーフにしたものは極めて稀です。ゴシック建築初期のサン・ドニ大聖堂(フランス)の内陣のクロケットとそっくりですので、駒杵はそれを参考にしたかもしれません。



初夏の旧本館・玄関ポーチの角柱



旧本館のクロケット(拳華飾り)



旧太田中学校講堂玄関ポーチ(葉形)

10 フィニアル

—華やかさを演出する屋根飾り—

洋風建築では、屋根の棟や尖塔の頂上に設置する飾りをフィニアル(頂華)と呼びます。和風建築では、これを棟飾りとか鬼板と呼びます。

現在、旧本館には正面玄関の切妻破風屋根に四角錐のフィニアルと、東西両棟端部の妻小屋根にアカンサスの葉を模したフィニアルが掲げられているだけです。創建当時の古写真を見れば、正面玄関の切妻破風屋根や正面両翼端の切妻破風屋根には、それぞれアカンサスの4弁の花を模した華麗なフィニアルが掲げられていたことが確認できます。また、東西両棟出入口や中庭側出入口の妻小屋根の棟には現在は何も飾りはありませんが、かつては東西両棟端部と同様の葉を模したフィニアルが掲げられていたものと思わ



正面玄関屋根の四角錐飾り



アカンサス(葉形)のフィニアル

れます。旧本館の屋根には全部で9つのフィニアルが掲げられ、華やかさを演出していたようです。

11 アカンサス

—生徒に託す「絆」と「気品」—



アカンサスの花・葉

アカンサスの花や葉の文様は、旧本館ではカトルフオイルと並んで極めて象徴的に使用されています。現在は、正面玄関の柱頭飾りや六芒星の漆喰飾り、東西両棟端部の妻小屋根のフィニアルに見ることができます。かつては、前述のとおり旧本館の屋根には全部で9つのアカンサスのフィニアルが華々しく飾られていましたので、旧本館は「アカンサスの学舎」と呼ばれていました。

アカンサスは、地中海沿岸を原産とする大型の常緑多年草です。葉が特徴的であり、切れ込みが深く濃緑色で光沢があります。ギリシアの国花であり、和名はハアザミです。本校では旧本館西棟沿いに植わっており、毎年初夏に見事な花を咲かせます。花は、紫色のとがった苞葉とともに筒状の白色の花弁を付けます。

駒杵は、なぜアカンサスをシンボルにしたのでしょうか。単に当時流行のデザインだったからでしょうか。アカンサスの花言葉は、「芸術」「技巧」とともに、「離れない結び目」と「気品ある振る舞い」です。離れない結び目とは、つまり人と人をつなぐ絆の意です。駒杵は、本校で学ぶ生徒に絆と気品を持ち続けてほしいという願いを込めたのではないかと思います。駒杵の造った旧太田中学校講堂や旧茨城県立商業学校本館など学校建築物にもアカンサス(葉)を模した棟飾りが掲げられ、駒杵のこだわりを強く感じます。

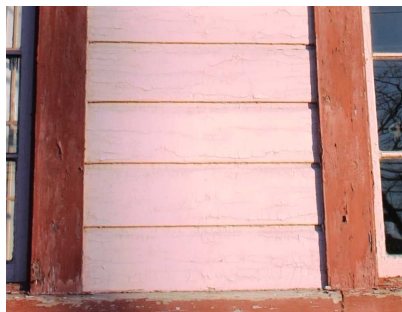


旧太田中学校講堂鬼板(アカンサス葉形)

12 外壁と建築基礎

—ドイツ下見板張りといギリス積み—

外観の美にこだわった駒杵は、外壁には縦長窓(上げ下げ窓、横軸回転窓)など垂直体を強調した直線を多用するとともに、横の直線を強調したドイツ下見板張りを採り入れ、縦横の直線構成の美しい外観を造り上げています。洋風建築における外壁の横板張りには、大別するとドイツ下見板張りといギリス(南京)下見板張りがあります。旧本館では、目地からの雨のしみ込み



ドイツ下見板張り

をより防ぎ、横目地が横の直線をより強調できるようにドイツ下見板張りを採用していると思われま^{あずき}す。外壁の塗色は、木骨部が小豆色、板張り部が桃色です。

建築基礎は、下から地中の凝灰岩と2段の煉瓦積み、地上の御影石(花崗岩)と6段の煉瓦積みからなり、その上に木材の付土台を敷いています。煉瓦の積み方には、大別するとイギリス積みとフランドル(フランス)積みがあります。イギリス積みは煉瓦を長手(長辺側)だけの段、小口



正面東翼の外壁



廊下床下の基礎



イギリス積み(旧本館基礎の煉瓦積み)



フランドル積み(旧富岡製糸場)

(短辺側)だけの段と一段おきに積む方式であり、フランドル積みは一段に長手と小口を交互に積む方式です。駒杵は当時一般的であったイギリス積みを採用しています。

13 屋根 —スレートや風見で洋風を演出—

屋根は、全体的に寄棟ですが、正面玄関が切妻、その両側の尖塔が方形、そして左右両端部が方形と切妻というように立体性のある多彩な造りにしています。また、正面東西両翼の屋根面には3個ずつ小さな三角形の換気のためのドーマー窓(屋根窓、屋根飾り、千鳥破風)を設け、トレfoil(三つ葉文様)のガラリ(鎧窓)にして、より装飾性を高めています。



西翼のドーマー窓(屋根窓)



スレート葺き屋根

屋根は、スレート葺きとして屋根材には天然スレートを使用しました。駒杵は、本格的な洋風建築にするため、「日本瓦」ではなく西欧古来の「天然スレート」にこだわったものと思われま。旧本館では、硯石にも使われる黒色粘板岩を採用しています。当時、国内では宮城県登米市登米町と石巻市雄勝町で採掘されていました。それぞれ「とよま玄昌石」「雄勝石」と呼ばれています。旧本館ではどちらかを使用したものと思われま。昭和42年(1967)、築後60年が経ち雨漏りが出始めたため屋根の葺き替えを行いました。その際、屋根材は財政的理由から安価な人造スレート(カラーベスト)に変更されてしまいました。

創建時、左右両端の方形屋根の頂部には、それぞれ旗印型風見が設置されていました。西端部の風見は、今も実際に動いて風向きを示しています。しかし、東端部の風見はいつの時期か無粋な避雷針と固定鉄骨に改変されています。



西端部の旗印形風見



東端部の避雷針・固定鉄骨

14 正面東端部

—魅せる優美なフォルム—

次に正面玄関から正面東翼沿いに東端部角まで進みます。職員室の外側となる東端部の外観は、ドイツ下見板張りと同縦長窓が作り出す縦横の直線構成が美しさを引き立たせています。



正面東翼



東端部角



東棟部全景

15 東棟部

正面東端部角を左に曲がると、東棟です。入学の時期には、東棟沿いの桜の古木が見事に咲き誇り、新入生を優しく迎えてくれます。

16 東棟端部

—切り詰めて復元—

かつては東棟と西棟にそれぞれ3教室が配されていました。しかし、新校舎（特別棟）建設のため昭和49年度の改修工事の際に、両棟各1教室を切り詰め、元の妻小屋根（軒屋根）や御影石の昇降階段を取り付け、また妻小屋根には新たにアカンサスの葉を模したフィニアルを飾り、北側外観を創建当時に忠実に再現しました。このフィニアルは、



東棟端北口の御影石階段

博物教室棟の南妻に残っていたものを基に在来の工法に従って製作したものです。

旧本館の階段や基礎等には、たくさんの御影石が使われています。創建時には、普請場の葺張り小屋には大勢の石工が働いていたようです。御影石を金槌で刻む音が近隣まで鳴り響き、「パカパ節」と呼ばれる歌が地元の老若男女に流行ったということです。

♪パカパ・パカパは何処からはやる 真鍋中学校の石屋さん パカパ♪



東棟端部の全景

17 中庭側

—後ろ姿も美しい—

後ろ姿の旧本館にも、縦長窓など垂直体を多用していることがよくわかります。中庭側中央部の出入口には妻小屋根を設け、観音扉にカトルフォイルを配して装飾性を高めています。また、別棟の小使室（用務員室）と旧本館を結ぶ出入口にも妻小屋根を付けています。



中庭側を鳥瞰



中庭の和風庭園

中庭には、小使室、物置、井戸があったことが創建当時の校舎配置図に示されています。現在は昭和62年に創立90周年記念事業として造られた和風庭園となっています。



西棟端部の全景

18 西棟端部

校舎に沿ってさらに進むと、西棟端部です。東棟端部と全く同じ形状となっています。

19 西棟部

西棟端部を左に曲がれば、西棟全景が観られます。西棟周辺には建物を遮るような樹木がないため、旧本館を十分に堪能できます。初夏には煉瓦積み基礎に沿って咲くアカンサスの可憐な花が彩りを添えます。西出入口は、東西両棟端部の出入口と同じ形状となっていますが、フ



西棟西出入口の妻小屋根



妻小屋根の尖頭飾り